

## 2011 年度 全学自己点検・評価委員会報告書

### 「共通科目ラーニング・アウトカムズにもとづく試験的評価」

1. はじめに
2. ラーニング・アウトカム導入の背景
3. パイロット授業実施のプロセス
4. 2011 年度前期の取り組みと評価事例
5. 2011 年度後期の取り組み
6. 今後の展望

#### 別添資料

資料 1. 2011 年度前期アセスメント・パイロット授業報告書

資料 2. 2011 年度後期アセスメント・パイロット授業報告書

## 1. はじめに

本学は、2010年8月より、学士課程教育機構の主導のもと、共通科目授業の履修により習得すべき知識と能力の学習成果（ラーニング・アウトカムズ）の策定に着手し、2011年1月には8項目からなるラーニング・アウトカムズが承認された。その後、各授業の到達目標とラーニング・アウトカムズとの関連を明確にするために、各項目をより具体的な知識または能力として定義する細目案が策定された。

ラーニング・アウトカムズの導入の目的は、学生が共通科目授業の学習を通し、求められる学習成果を修得したか評価する授業アセスメントの側面と、共通科目が提供する授業群がラーニング・アウトカムズを達成するために十分な構成となっているか評価するカリキュラム・アセスメントの側面を有している。そのため、本学ではラーニング・アウトカムズ策定後の2011年度に、パイロット授業を選定し、ラーニング・アウトカムズと授業到達目標の関連、評価手法、授業到達目標の達成についてアセスメントを実施した。

本報告書では、ラーニング・アウトカムズ導入の背景、ラーニング・アウトカムズと第一次細目案の策定、パイロット授業実施までのプロセス、そしてパイロット授業が提出した授業報告書をもとに2011年度前期のアセスメントの試みを紹介する。また、第2次細目案の提示など2012年度後期の取り組みとこれらの経験をもとに今後の展望を行う。

## 2. ラーニング・アウトカム導入の背景

共通科目運営センターは、教養教育をより深化発展させるために2003年4月に発足し、2010年4月の学士課程教育機構の発足により統合された。同センターは、11の科目群ごとの担当者会とそれぞれの責任者で構成されており、学士課程教育機構運営委員会での最終的な意思決定がなされる。各担当者会は、非常勤講師を含めた共通科目を担当する全教員を対象としており、科目群ごとに原則各セメスター1回開催され、授業コマの調整や意見交換を行うほか、FD活動の一環として学生の授業外学習時間を増やす工夫等について報告しあっている。

2010年度より共通科目運営センターが重点を置いているのが、共通科目のラーニング・アウトカムズの策定であった。この背景には、2つの後押しがあったと考えられる。第1に高等教育をめぐる環境変化である。たとえば、中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」（平成20年12月）では、「各専攻分野を通じて培う学士力」が提唱され、「何を教えたのか」から「何ができるようになるか」といった学習者中心のカリキュラム作りが求められた。また、日本学術会議による「回答 大学教育の分野別質保証の在り方について」（平成22年7月）においても、学問分野別の到達目標とその測定方法事例が紹介された。さらに、

2011年度より、学部・学科ごとの教育研究上の目的や、授業科目、授業の方法や内容、年間授業計画などの情報公開が義務化され、「教育課程を通じて修得が期待できる知識・能力の体系」や「学修成果への評価や卒業認定への基準」も努力義務として公開が求められるに至った。

第2に、よりよい授業を提供していこうという本学の取り組みの流れである。個別教員による授業改善の動きは以前からあったが、組織的な取り組みは2000年に教育・学習活動支援センター（CETL）の発足がターニング・ポイントとなった。CETLは、授業見学会や季刊紙『セトル・クォーターリー』での「私の授業改善法」の連載、ティーチング・ポートフォリオの推進などを実施していた。また、全学的にも2009年度より共通科目にコアカリキュラムを導入したり、授業内容のスタンダード化を進めてきたりした。

こうした一連の動きに対して学士課程教育機構では、共通科目運営センターの理念・目標、輩出する人材像から導き出した共通科目におけるラーニング・アウトカムズ策定への検討を開始し、2010年9月から学長室会議、学士課程教育機構運営委員会、共通科目担当者会等で審議を重ね、翌年1月の学士課程教育機構運営委員会で8項目から本学共通科目のラーニング・アウトカムズが策定された（表1）。

表1 創価大学共通科目のラーニング・アウトカムズ

<p><u>知識基盤（学生が何を知っているべきか）</u></p> <p>1. 人文・社会・自然科学、健康科学領域の基礎知識を理解する。</p> <p><u>実践的能力（学生が何ができるようになるべきか）</u></p> <p>2. 多面的かつ論理的に思考する。</p> <p>3. 問題解決に必要な知識・情報を適切な手段を用いて入手し、活用する。</p> <p>4. 日本語による多様な表現方法を習得し、明瞭に論じ述べる。</p> <p>5. 英語と母語以外の他外国語でコミュニケーションを図る。</p> <p><u>教養ある市民としての資質（知識と能力を用いて何を行おうとするか）</u></p> <p>6. 学びの意味や社会的責務を考え、自らの目標を設定し、自立(律)的に学ぶ。</p> <p>7. 自他の文化・伝統を理解し、その差異を尊重する。</p> <p>8. 人類の幸福と平和を考え、自己の判断基準をもつ。</p>
--

### 3. パイロット授業実施のプロセス

以上のプロセスで策定された共通科目のラーニング・アウトカムズが、実際の授業で活用されるためには、(1)ラーニング・アウトカムズの細目づくりと(2)パイロット授業による

アセスメントの実施、の2つが2011年度において必要な取り組みであると考えられた。

まず、(1)については、ラーニング・アウトカムズ8項目それぞれが具体的に意味することを示す細目を学士課程教育機構内の小委員会で検討し、2011年1月の学士課程教育機構運営委員会に第1案として提示した<sup>1</sup>(表2)。

表2 創価大学共通科目ラーニング・アウトカムズ第一次細目案(2011年1月)

大項目	ラーニング・アウトカムズ細目案
1	各科目に応じる
2	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 一つの事象を多面的に考察することができる。</li> <li>● 問題・課題の本質を推察し、適切な仮説を立てることができる。</li> <li>● 質的または量的根拠にもとづき、結論の妥当性を判断できる。</li> </ul>
3	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 必要かつ十分な情報を収集することができる。</li> <li>● 情報とその情報源の信憑性を判断できる。</li> <li>● 特定の目的(問題解決)に情報を有効的に利用できる。</li> <li>● 情報の入手、利用に際し法律および倫理を尊重する。</li> </ul>
4	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 論述文において、段落構成、文章作成の基礎作法を理解し、論点が明らかな文章を作成することができる。</li> <li>● プレゼンテーションにおいて、目的と内容、聴衆に応じて適切な表現と様式を用い、明瞭かつ説得力を持って論点を伝えることができる。</li> <li>● 討議において、他者の見解の考察を踏まえ、論点と根拠を明確にし、自身の見解を伝えることができる。</li> </ul>
5	<ul style="list-style-type: none"> <li>● コミュニケーション、会話を行うための基礎的な技能を身につけている。</li> <li>● 語彙力、婉曲的な表現力、言い換えを使い、具体的な話題や課題、抽象的な考えを伝えられる。</li> <li>● 動詞の時制と、コミュニケーションの形態を理解し、重文や複雑な文章の構成を使いこなせる。</li> <li>● 非言語の表現を理解し、コミュニケーションを図れる。</li> </ul>
6	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 「何のために学ぶのか」との問いかけに、自分なりの考えや意見をもっている。</li> <li>● 社会的市民としての自覚を深めている。</li> <li>● 目標を設定し、計画的に学習することができる。</li> <li>● 主体性をもって課題を発見し、学習することができる。</li> </ul>

<sup>1</sup> 小委員会は学士課程教育機構の寺西機構長を責任者とし、西浦副機構長、佐々木准教授、山崎准教授で構成され、適宜 CETL の関田センター長など関係者の助言を受けた。

7	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 自らの文化や考えを他者にわかりやすく伝えることができる。</li> <li>● 自分とは異なるバックグラウンドをもった人と議論ができる。</li> <li>● 他者の意見を傾聴し、他国の文化や伝統から学ぼうとする姿勢がある。</li> </ul>
8	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 世界の平和などグローバル問題について関心を持ち、学ぼうとしている</li> <li>● 自分だけではなく、他者の幸福について考えることができる</li> <li>● 自分の立場や考えを、説得力を持って述べるができる。</li> </ul>

(注) 大項目は表 1 の番号 (ラーニング・アウトカムズの 8 項目) に対応している。

次に、(2)については、2011 年度においては 8 項目ごとに 2~4 のパイロット授業として選定した。選定基準は、全 LOs 大項目を網羅、全科目群の科目を網羅、全学部の所属教員を網羅、その他、LOs 測定にふさわしいと思われる科目、とした。これらは今後の全学的な展開を見越しての基準であった。まず、候補授業の選定と担当教員への打診が行われ、2011 年度前期には 21 の授業の担当教員よりパイロット授業の了承を得た。次に、2011 年 1 月下旬から 2 月にかけてパイロット授業と学士課程教育機構のラーニング・アウトカムズ小委員会のスタッフが面談し、趣旨説明をおこなった。これは、2011 年 2 月末日が次年度シラバスの入力をする必要があるため、「授業の到達目標」などシラバスに入力する際に、ラーニング・アウトカムズの理解が不可欠であると考えたためであった。面談の際に、小委員会から Semester 終了時にパイロット授業報告書の提出への協力を依頼した。

#### 4 . 2011 年度前期の取り組みと評価事例

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災とこれに伴い授業の開始時期を 5 月に延期したことは、各パイロット授業の担当者にとって授業計画の変更を強いられることになった。つまり、授業回数が通常の 15 回から 11 回に変更したことにより、当初予定していた授業の到達目標を達成するのが困難になったことである。2011 年度前期実施のパイロット授業のうち、2011 年末までに共通科目 19 授業における報告書が提出された。同報告書は、以下の項目を該当 LOs 細目 (第 1 次案) ごとに記載している。

- A 該当 LOs 細目とシラバスの「到達目標」がどのようにリンクしているか
  - B その「到達目標」の達成に向けてどのように取り組んだか
  - C その到達度をどのような評価手法で測り、どう判定したのか
- 該当しない場合は「該当なし」と記載

特に C については可能な範囲で根拠資料を添付することがもとめられた。さらに、感想・意見の自由記述欄が設けられ、表 3 のようなコメントがあった。

表3 前期パイロット・アセスメント授業の感想・意見  
(2011年度前期アセスメント・パイロット授業報告書より抜粋)

- ・ LOs を明確化することで授業計画、内容、評価までの流れに一貫性を持つことができた。
- ・ 授業の取り組みや工夫の省察を促すツールとしてこのような報告書の取り組みは有効であるとする。
- ・ 「到達目標」に達したかを、如何に、また具体的に数値化していくのが良いのか、まだまだ改善の余地があるように思われる。
- ・ ディスカッションの内容をもとに「到達目標」の到達度をどのように測定すればよいか判断が難しい。
- ・ 授業の短縮により到達目標の効果的な測定が困難となった。
- ・ 細目によっては統一した課題と評価を行うことも効率的であるとする。
- ・ 第2外国語などの初修外国語は、最終到達点を細目として表すことになるので、I~IVをセットにしてラーニング・アウトカムズを考えることが実情にあっている。
- ・ 本授業は、PF 評価であり、一定の出席と課題の提出で単位を取得できることから、今後どのように質的保証を担保するか課題である。
- ・ オムニバス形式の授業であり、かつ 1000 名に近い履修者であったため、TA の協力を得てレポート評価をしたが、評価者間の差異があり調整が困難であった。
- ・ オムニバス形式の授業では様々な教え方により、ラーニング・アウトカムズが測りにくい。
- ・ 考察力を評価するには工夫が必要である。

上記コメントより、ラーニング・アウトカムズと評価の導入は、学生の授業到達目標の修得に対し、より効果的な教授・学習方法を考察し、到達目標の評価方法が妥当であるか検討する機会となったと考えられる。履修者の多い授業や複数の講師が担当される授業においては、評価自体が困難を極めるケースもあり、学内において効果的な評価手法を周知・共有することも重要であると推察される。各パイロット授業の報告書は別添資料1として添付する。

また、ここでは、個別事例として学士課程教育機構佐々木准教授が提出した「健康人間学」の授業報告書をもとに、到達目標の達成に向けての取り組みや到達度の測定・成績評価について紹介したい。「健康人間学」の授業は毎回講師が異なるオムニバス方式の授業で受講者は約 500 名である。2011 年度は震災の影響で全 11 回の授業となったため、最初にガイダンス的に授業の概要や成績評価、履修上の注意について紹介し、後の 10 回は 10 人の異なる講師が担当した 10 回のレポートまたは小テストを課し、各 10 点満点で成績評価

した。

「健康人間学」は、ラーニング・アウトカムズの大項目1「人文・社会・自然科学・健康科学領域の基礎知識を理解する」のパイロット授業として実施しており、同項目のラーニング・アウトカムズ細目は「各科目に応じる」としていたため、授業の到達目標を表4のように設け、10回の講義の位置づけを明確化するように心がけた。

表4 健康人間学における評価の試み  
(パイロット授業報告書：2011年度前期「健康人間学」より)

<p>1. <u>人の体の精緻さと危うさを理解し、健康で充実した学生生活を過ごすために有益な健康と医学に関する知識を習得する。</u></p> <p>(1) 健康的な学生生活のために 睡眠・喫煙 (2) 健康的な学生生活のために ストレス (3) 身体のしくみ 感染症と予防</p> <p>2. <u>生涯にわたる自他の健康を守り、心豊かな人生のために必要な疾病予防や健康管理のための知識を習得し、医学的な視点から考える力を身につける。</u></p> <p>(4) 身体のしくみ 免疫と消化器の不思議 (5) 生命を守る 心疾患と最新治療 (6) 生命を守る 救急医療の今 (7) 生命を守る 「がん」予防から克服まで (8) 心豊かな人生を目指して 聴くこと・話すこと</p> <p>3. <u>世界と社会の健全な発展のために、医療の現状と課題を知り、これからの医療の在り方について考察する力を身につける。</u></p> <p>(9) 生命を守る 発展途上国のいのちの格差 (10) 医療と社会を考える</p>
--

(注) 1~3の下線部は授業の到達目標、(1)~(10)は授業内容を表している。

次に、成績評価については、各授業後に課されたレポート評価として、それぞれの課題に応じて独自に作成したルーブリックを用いた。ここでは例として、課題レポート「予防接種の意義について、あなたが学んだことを1000~1500字でまとめなさい」を紹介する(表5)。レポート評価にルーブリックを導入することにより、課題評価に際しての統一性とトランスペアレンシーを確保することが可能となり、あわせて学生に対するアカウントビリティを保証することにも寄与する。特に、500人を超す履修学生のレポート課題を採点するに際し、ルーブリックは採点の効率性と正確性を高めるためにも効果的であると考えられる。

表5 ルーブリックの実例  
 (パイロット授業報告書：2011年度前期「健康人間学」より)

評価項目	2	1	0
予防接種の定義	予防接種の定義を十分に理解し記されている。 ・ ワクチンとは、感染症の原因となるウイルス・細菌の毒素を弱め安全に加工したもの。 ・ ワクチンは、罹患する前に接種し、免疫力を作る。	予防接種の定義を理解し、ある程度記されている。(左項目のいずれか一つ)	予防接種の定義がなされていない。
予防接種の効果	予防接種の効果を十分に理解し具体的な効果が記されている。 ・ 予防接種により、病気にかからないか、またはかかっても症状が軽くすむ。 ・ 健康な成人のインフルエンザに対する発症予防効果は70～90%、または予防接種は高齢者の死亡の危険を約80%減少する。	予防接種の効果を理解し、その効果が具体的ではないが記されている。	予防接種の効果について記されていない。
予防接種の意義	予防接種の意義を十分に理解し記されている。 ・ ワクチンによる集団免疫・社会全体の免疫を獲得する。 ・ 個人のみならず、抵抗力の弱い人たちを守る。 ・ ワクチン接種は社会における責任と考えられる。	予防接種の意義を理解し、ある程度記されている。(左項目の少なくとも一つ)	予防接種の意義について記されていない。
考察	予防接種の効果と意義に関連し、予防接種の重要性について考察が記されている。	予防接種について何らかの意見や感想が記されている。	予防接種について個人の意見や感想が記されていない。

(注) 採点は、10点満点に換算してレポート評価を行った。

## 5. 2011年度後期の取り組み

2011年度後期の取り組みは、主に(1)後期パイロット授業の実施、(2)ラーニング・アウトカムズ第2次細目案の作成と提示、(3)次年度シラバスへのラーニング・アウトカムズの入力、の3点があった。まず後期パイロット授業の実施については、新たに7授業がパイロット授業として2011年度後期から実施されている。この中には、前期授業でカバーできなかったJSP (Japan Study Program) 科目、健康・体育科目、日本語・日本文化科目が入り、2011年度を通じて、パイロット授業の選定基準である全L0s大項目の網羅、全科目群の科目の網羅、全学部の所属教員の網羅が達成される見通しとなった。なお、言語は前期の英語、中国語、ドイツ語に加え、後期にはフランス語、韓国語がパイロット授業に加わった。

報告書のコメントより、前期実施したパイロット授業報告書においても散見されたように、ラーニング・アウトカムズの導入は、「到達目標・そのための取り組み・評価法を明確



にする」機会となり、それらの学生に公開することは、「学生の学習意欲を高めるためにも重要」であると理解されている。一方で、ラーニング・アウトカムズの導入により、授業の到達目標として明示的な評価と評価手法に重点が置かれ、授業成果のインプリシットな部分が注視されなくなる懸念があるとの指摘もあった（表6）。

表6 後期パイロット・アセスメント授業の感想・意見  
(2011年度後期アセスメント・パイロット授業報告書より抜粋)

- 測定が難しいと思われるものをどう評価するのか要検討である。この授業では、留学生との交流、小グループによるスキット発表など。交流に積極的な学生をどう評価をするか。
- 個人の学び、グループやクラス全体の学びについて、説明方法を模索する機会となった。学習の「実態」と、ラーニング・アウトカムズで「説明」できることとの間に、埋まらない溝のような隔りがあることを感じている。
- ラーニング・アウトカムズが導入されていく流れの中で、説明できる成果に注目し過ぎ、または説明しようとする手続きに力を注ぐあまり、気づかぬうちに、これまで積み上げてきた豊かな授業の実りを薄っぺらなものに変質させることのないよう、注意していきたいと思う。
- 各グループ内の最終発表に至るまでの貢献度を測るにはどうすればよいか工夫していきたい。
- L O s は英語をベースにしたものであるように思われる。そのため、学生が初めて学習する英語以外の言語については、L O s の項目が適正かどうか今後の課題である。
- C E F R (ヨーロッパ言語共通枠) 基準を各言語の共通ベースとし、本学学生に適した基準を設定し、外国語教育を行っていくことが求められる。
- 到達目標・そのための取り組み・評価法を明確にし、公開することは、学生の学習意欲を高めるためにも重要であると思われる。
- いずれの細目も学生による自己アセスメントを行っており、学生自身が能力が向上したと判断できる機会となった。
- 細目 と「到達目標」との整合性が高くなく、授業評価として項目にも加えていなかったことから、授業内での評価ができなかった。今後工夫が必要と感じている。

次に、第2次細目案の提示である。前期パイロット授業の報告書を分析しながら、より細目についてはよりシンプルな表現を心がけて小委員会において表6のように、第2次細目案を作成し、2011年10月に開催された学士課程教育機構運営委員会に提示した。第2次案については異論も存在し、まだ確定という段階には至っていない。2012年度中には現行の共通科目ラーニング・アウトカムズの細目について学内的なコンセンサスを得ていきたいと考えている。

表7 創価大学共通科目ラーニング・アウトカムズ第二次細目案（2011年10月）

大項目	ラーニング・アウトカムズ細目案
1	各科目に応じる。
2	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 一つの事象を多面的に考察することができる。</li> <li>● 問題・課題の本質を推察できる。</li> <li>● 定量的または定性的な根拠にもとづき、論理的に思考できる。</li> </ul>
3	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 倫理や法律を守り、知識・情報を収集できる。</li> <li>● 適切な知識・情報を、問題解決のために有効活用できる。</li> </ul>
4	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 論述文において、文章作成の基礎作法に基づき、論点が明らかな文章を作成することができる。</li> <li>● プレゼンテーションにおいて、明確に論点を伝えることができる。</li> <li>● 討議において、他者の見解の考察を踏まえ、自身の見解を伝えることができる。</li> </ul>
5	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 表現に必要な基本的な語彙を知っている。</li> <li>● 基本的な文法を理解している。</li> <li>● コミュニケーションのための基礎的な技能を身につけている。</li> </ul>
6	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 「何のために学ぶのか」との問いかけに、自分なりの考えや意見をもっている。</li> <li>● 目標を設定し、計画的に学習することができる。</li> <li>● 主体性をもって課題を発見し、学習することができる。</li> </ul>
7	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 自らの文化や考えを他者にわかりやすく伝えることができる。</li> <li>● 自分とは異なる立場や属性をもった人と議論ができる。</li> <li>● 他者の意見を傾聴し、その文化や伝統から学ぼうとする姿勢がある。</li> </ul>
8	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 世界の平和など人類の課題について関心を持ち、学ぼうとしている。</li> <li>● 自分の立場や考えを、説得力を持って述べることができる。</li> </ul>

（注）大項目は表1の番号（ラーニング・アウトカムズの8項目）に対応している。

2011年度後期の第3の取り組みは次年度シラバスへの該当ラーニング・アウトカムズの入力である。これは次年度の共通科目のシラバスを入力する際に、ラーニング・アウトカムズの8項目の中でその授業で該当すると思われる項目を最大3項目までチェックするもので、これによりシラバスを参照する学生がどのラーニング・アウトカムズに該当しているかを認識することが可能になる。これについては本学の情報システム部の協力を得てイメージ画面を作成し、11月より開催された共通科目の担当者会で説明されたほか、各学部での教授会資料にもなった。

## 6. 今後の展望

これまでの共通科目ラーニング・アウトカムズの策定への一連の流れと今後の展望をまとめたものが図1である。2012年度には、共通科目各授業の到達目標の明確化をはかるとともに、11の科目群から各 Semester 1~2 授業を選定し、シラバスで掲げた「授業の到達目標」の測定に向けてパイロット的に実施していく予定である。さらに2013年度からは全学展開も想定しており、その実施期間と対象授業範囲が今後検討されていく予定である。また、学士課程教育機構としては2012年度よりシラバスに入力された該当ラーニング・アウトカムズの情報をもとに共通科目のカリキュラム・マップづくりに着手したいと考えている。

さらに、ラーニング・アウトカムズの導入の目的であるカリキュラムの改善と授業の改善を果たすために、PDCA サイクルに即しながら内部質保障システムを確立することを目指していく(図2)。カリキュラム・マップに基づき、共通科目が提供する授業群がラーニング・アウトカムズ達成のために十分な構成か評価し、必要であるならばカリキュラム改訂に着手する。また、共通科目授業の学習を通し、求められる学習成果を学生が修得したかアセスメントすることにより、授業内容、成績評価手法、授業到達目標の改善に取り組み、学士課程教育の質を担保していきたい。

図1 創価大学共通科目ラーニング・アウトカムズ設定の流れ

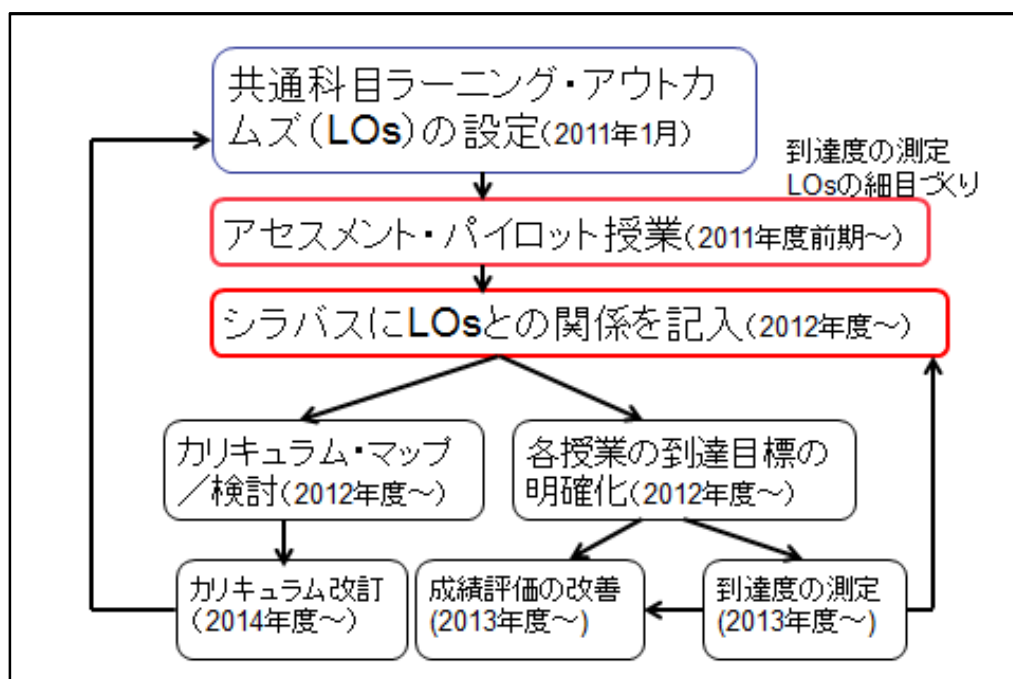
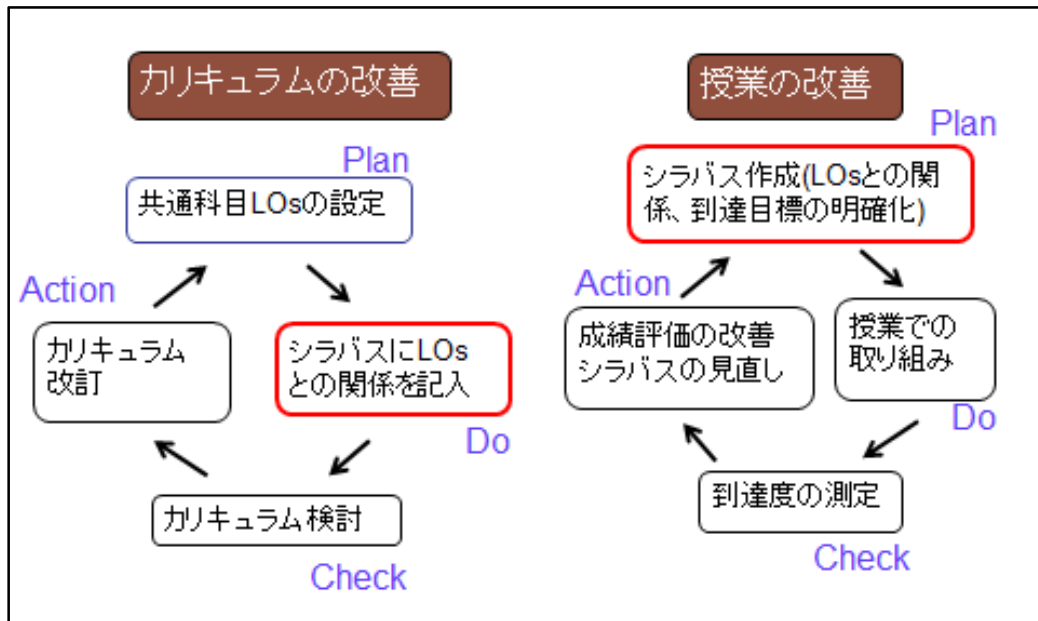


図2 創価大学共通科目の内部質保証システム



別添資料 1

**共通科目ラーニング・アウトカムズ (L0s)**  
**2011 年度前期アセスメント・パイロット授業報告書**

記入 2011 年 8 月 30 日

科目名 数理科学：統計学入門 I

担当者名 (所属) 馬場 善久 (経済学部)

該当ラーニング・アウトカムズ大項目：1. 人文・社会・自然科学、健康科学領域の基礎知識を理解する。

該当ラーニング・アウトカムズ細目

さまざまな基礎統計量の概念を理解することができる。

実際のデータを使い、Excel などの表計算ソフトで統計分析を行うことができる。

確率の基礎的な概念を理解し、簡単な例についての確率を計算することができる。

該当 L0s 細目	A 該当 L0s 細目とシラバスの「到達目標」がどのようにリンクしているか	B その「到達目標」に対してどのように取り組んだか	C その到達度をどのような評価手法で測り、どう判定したのか
	科目の到達目標として策定	毎回の授業で、基礎的な統計量について例を用いて説明を加えた。扱った統計量等は以下の通りである。度数分布表とヒストグラム、平均、中央値、最頻値、範囲、四分位範囲、分散、標準偏差、箱ひげ図、共分散、相関係数、回帰直線。	宿題、レポートと試験によって、その到達度を測定した。その中で試験においては、アメリカのミネソタ大学の教育学者が開発した統計の理解度テストを翻訳して、20 問の問題を作成した。試験の結果は履修者 40 名中、37 名が受験、平均正解率は 12.9 問であった。
	同上	毎回の授業で Excel の使用を説明し、課題を与えて自分で分析、提出をしてもらった。また、レポート課題は学生自身が興味に従い、データを探し、それを分析するというものであったので、レポート作成で Excel を利用して実際にデータ分析することが必須	毎回の授業の課題は、SA にチェックしてもらった。SA の報告では授業で解説した Excel の技法はほとんどの学生が修得しているとのことであった (このことは毎回一部のサンプルで確認した)。レポート課題の採点では Excel での分析にはあま

		であった。	り問題がなかったが、レポートの日本語表現や形式について多くの学生が大学のレポートの水準に達していなかった。
	同上	今回は 11 回の授業で確率の部分までカバーすることができなかった。	

記入 2010年9月10日

科目名 生命科学：健康人間学

担当者名（所属） 佐々木 諭（学士課程教育機構）

該当ラーニング・アウトカムズ大項目：1. 人文・社会・自然科学、健康科学領域の基礎知識を理解する。

該当ラーニング・アウトカムズ細目

本講義は、健康と医学に関する基礎知識を習得し、医学的な視点から考察する力を身につけることを目的とする。具体的な到達目標は以下の通り

人の体の精緻さと危うさを理解し、健康で充実した学生生活を過ごすために有益な健康と医学に関する知識を習得する。

生涯にわたる自他の健康を守り、心豊かな人生のために必要な疾病予防や健康管理のための知識を習得し、医学的な視点から考える力を身につける。

世界と社会の健全な発展のために、医療の現状と課題を知り、これからの医療の在り方について考察する力を身につける。

該当 LOs 細目	A 該当 LOs 細目とシラバスの「到達目標」がどのようにリンクしているか	B その「到達目標」に対してどのように取り組んだか	C その到達度をどのような評価手法で測り、どう判定したのか
	LOs 細目を到達目標として設定	11回の講義の中で、健康的な学生生活を過ごすために必要な知識を履修学生が習得するために、「健康的な学生生活のために 睡眠・喫煙」、「健康的な学生生活のために - ストレス」、「感	それぞれの講義後に、講義内容に関する小テスト課題、またはレポート課題(A4 1枚)を提示し、ループリックを用いて評価した。

		染症と予防」と題した講義を実施した。	
	同上	生涯にわたり健康かつ心豊か人生を送るために必要かつとりわけ重要なトピックを選択し、以下の講義を行った。「身体のしくみ 免疫と消化器の不思議」、「生命を守る 心疾患と最新治療」、「生命を守る 救急医療の今」、「生命を守る がん予防から克服まで」、「心豊かな人生を目指して 聴くこと・話すこと」	それぞれの講義後に、講義内容に関するレポート(A4 1枚)を課題として与え、ループリックを用いて評価した。ループリック評価には「考える力」も測れるよう考察力も評価として加えた。
	同上	世界と社会における医療のあり方を考察する力を身につけるために、「医療と社会を考える」、「生命を守る 発展途上国のいのちの格差」をテーマに講義を行った。	それぞれの講義後に、講義内容に関するレポート(A4 1枚)を課題として与え、ループリックを用いて評価した。ループリック評価には「考える力」も測れるよう考察力も評価として加えた。

記入 2011年 9月 18日

科目名 社会学

担当者名(所属) 有里 典三(通信教育部)

該当ラーニング・アウトカムズ大項目: 2 多面的かつ論理的に思考する。

該当ラーニング・アウトカムズ細目

一つの事象を多面的に考察することができる。

問題・課題の本質を推察し、適切な仮説を立てることができる。

質的または量的根拠にもとづき、結論の妥当性を判断できる。

該当 LOs 細目	A 該当 LOs 細目とシラバスの「到達目標」がどのようにリンクしているか	B その「到達目標」に対してどのように取り組んだか	C その到達度をどのような評価手法で測り、どう判定したのか
--------------	---------------------------------------	---------------------------	-------------------------------

	<p>シラバス到達目標の「先入観にとらわれたものの見方を一度破壊し、社会現象に含まれる複雑な意味秩序を多角的に読み解く視点を獲得する」にリンク。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・15回の講義を【A】基礎論(2回)【B】社会学的思考法(5回)【C】応用事例の解説(8回)に大別。【B】において、「価値基準の相対化」と「すべての事象を社会的文脈の中に位置づけて解釈する姿勢」を強調するとともに、一つの事象を多角的に考える方法(たとえば潜在的機能分析、自己成就的予言、ラベリング理論、社会的ジレンマ)を種々の具体例を通して紹介した。</li> <li>・講義内容の理解を促進し復習の際に活用できる基礎資料とするために、毎回のサブテーマごとに詳細なレジュメを作成して受講生全員に配布した。</li> <li>・毎回のサブテーマごとに古典や関連文献の書誌的情報を明示し、その概要について解説した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・レポート課題を3～4題出題しそれぞれのテーマにつき2～3週間でまとめさせた。字数は1,200～1,600字程度。判定基準は以下の4点。質的あるいは量的データの収集力と論拠としての妥当性。多角的・複眼的な視点の有無。常識にとらわれない社会学的思考法の理解力・活用力。レポートしての論理的一貫性と構成力。いずれも優・良・可の三段階評価。このレポートによる評価は全体の30%の比重。</li> <li>・期末試験は「リスク社会の本質を社会学的な視点から多角的に分析できる能力」をみるための問題を出題。試験の2週間前に候補問題を4～5題発表しその中から2題を出題。判定基準は前述のレポートと同じ。各20点満点で優・良・可の三段階評価。この期末試験は全体の40%の比重。</li> <li>・出席点は1回2点の累積評価。これは全体の30%の比重。</li> </ul>
--	--	---	---



	<p>シラバス到達目標の「分析的思考力を鍛える」および「現代社会がかかえている構造的な諸問題に対する理解を深め、問題解決に向けてのヒントを獲得する」にリンク。</p>	<p>・【C】応用事例の解説の講義を通して、社会学的思考法を活用できるトレーニングを行い、複雑な現象の背後に隠された本質を洞察する力を鍛錬した。</p> <p>・2回に1回（全体で6～7回程度）の割合で、リスク社会を象徴するような社会学的なトピックを紹介し、それについての質的または量的な情報を文書の形で提供。そのトピックの解説方法の一例をあげ、それに対する賛否や別の解釈、判断の根拠や妥当性について、15分間ほど受講生と議論する機会をもった。</p>	<p>・同上。</p> <p>・ディスカッション（私が情報を提供したリスク社会のトピックについて15分間×2回ずつ実施）。</p>
なし			

記 2011 年 8 月 31 日

科目名 倫理学入門

担当者名（所属） 伊藤 貴雄（文学部）

該当ラーニング・アウトカムズ大項目： 2. 多面的かつ論理的に思考する。

該当ラーニング・アウトカムズ細目

一つの事象を多面的に考察することができる。

問題・課題の本質を推察し、適切な仮説を立てることができる。

質的または量的根拠にもとづき、結論の妥当性を判断できる。

該当 LOs 細目	A 該当 LOs 細目とシラバスの「到達目標」がどのようにリンクしているか	B その「到達目標」に対してどのように取り組んだか	C その到達度をどのような評価手法で測り、どう判定したのか
	「みずからの属する社会の規範について自分の頭で考え、他人と議論する」	毎週、1～2回のグループ・ディスカッション（1グループ5～6名）およびそれを踏まえてのクラス全員の	ディスカッションの結果をグループごとに小レポートとして提出させ、重要な意見や問題

		<p>ディスカッション（全 180 名）を行った。ときにはテーマの選定もこれらのディスカッションを通して行い、できるかぎり受講者の自発性と関心を引き出すよう心がけた。</p>	<p>提起があれば次週の授業で紹介した。そのうえで、定期試験（論述）ではディスカッションの内容を踏まえた論述となっているか、を考慮しつつ採点した。</p>
	<p>「現代社会における『倫理』の問題を、身近なところから [...] 受講者とともに考える」</p>	<p>一例としては、「法と正義」という論題において、過去の刑事事件の判決文（第 1 審・第 2 審）を読ませ、それが実際は冤罪事件であったことは伏せた上で判決上の問題点を考えさせた。次に同事件が冤罪事件であり最高裁で逆転無罪になった事実を明かして、先に議論した第 1 審第 2 審判決文の問題点を探させた。</p>	<p>ディスカッションの結果をグループごとに小レポートとして提出させた。また、定期試験ではディスカッションの内容を踏まえた論述となっているか、を考慮しつつ採点した。</p>
	<p>「倫理学の基本主題を把握するとともに、哲学思想上の古典にも一定の理解を獲得する」</p>	<p>プラトン『ソクラテスの弁明』、『クリトン』、『パイドン』、カント『啓蒙とは何か』等、次週授業に関連する原典資料を毎週配布し、それについての「予習レポート」約 800 字を課した（全 10 回）。</p>	<p>毎週、予習レポートを授業終了後に回収し、（１）予習の論題を正確に把握しているか、（２）資料の内容を正確に把握しているか、を基準に 4 点満点で採点した。（全 10 回 = 総計 40 点） また、定期試験では、これら資料を踏まえて自分の議論を展開しているか、という点も含めて採点した。</p>

記入 2011 年 8 月 30 日

科目名 共通総合演習

担当者名(所属) 西浦 昭雄(学士課程教育機構)

該当ラーニング・アウトカムズ大項目: 2 多面的かつ論理的に思考する。

3 問題解決に必要な知識・情報を適切な手段を用いて入手し、活用する。

該当ラーニング・アウトカムズ細目

- 2 - 一つの事象を多面的に考察することができる。  
問題・課題の本質を推察し、適切な仮説を立てることができる。  
質的または量的根拠にもとづき、結論の妥当性を判断できる。
- 3 - 必要かつ十分な情報を収集することができる。  
情報とその情報源の信憑性を判断できる。  
特定の目的(問題解決)に情報を有効的に利用できる。  
情報の入手、利用に際し法律および倫理を尊重する。

該当 L0s 細目	A 該当 L0s 細目とシラバスの「到達目標」がどのようにリンクしているか	B その「到達目標」に対してどのように取り組んだか	C その到達度をどのような評価手法で測り、どう判定したのか
2 -	シラバス到達目標の「開発問題や援助について多面的に考察することができる」にリンク	・4 人一組で 3 チームをつくり、各グループが 2 回ずつ発表した後に、グループ・ディスカッションの機会を毎回設けた。 ・ディスカッション・テーマの選定については、テーマを選択する力を養うため、CETL 運用のブログ(Moodle)を活用して発表グループが事前に検討し、最終的に教員が了承した。他のグループ学生もそのブログ上のやり取りを見て事前に準備して臨むようにした。	・各グループによる 2 回ずつの発表に対して、教員および他グループ学生が評価シートを記入した。本項目に関しては「ディスカッション(テーマ、進行)」を点数化(5 点満点)し、コメントを記入した。 評価シートはコピーし、発表グループにフィードバックした。 ・教員による評価シートは各人の成績評価(10%分)に反映した。

2-	なし		
2-	シラバス到達目標の「質的または量的根拠にもとづき、結論の妥当性を判断できる」にリンク	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各グループはレジメもしくはパワーポイントに基づいて発表を行った。毎回質疑応答を入れるとともに、教員からは同到達目標を意識してフィードバックを行うようにした。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中間レポートとして、2500～3000字による「私の考える ODA の改善案」を課し、その評価項目として本項目を取り入れた。全員にフィードバックを行い、改善したものを最終レポートとして提出させた。その結果、全てのレポートにおいて本項目 5 段階中 4 以上の評価が見られた。</li> </ul>
3-	シラバス到達目標の「発表のために必要な情報を適切に収集することができる」にリンク	<ul style="list-style-type: none"> <li>・図書館を利用した資料収集についてコンピュータ室で講義した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各グループによる 2 回ずつの発表に対して、教員および他グループ学生が評価シートを記入した。本項目に関しては「リサーチ力（調査、参考文献）」を点数化（5 点満点）し、コメントを記入した。評価シートはコピーし、発表グループにフィードバックした。</li> <li>・教員による評価シートは各人の成績評価（10%分）に反映した。全グループが 2 回目の発表において「リサーチ力」の教員評価が 4 点以上となった。</li> </ul>

3-	シラバス到達目標の「情報を適切・有効に活用することができる」に対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>各グループ発表においてはレジメもしくはパワーポイントのハンドアウトにおいて情報源を正確に明記することを求めた。</li> <li>レポートの作成にあたっては、(1)CETL の添削サービスを活用、(2)教員がフィードバック、(3)最終レポートを教員が評価する、という3段階で行うことで本項目を達成できるよう心掛けた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>で紹介した評価シートに加え、中間・最終レポートにおいて「情報収集力」を評価項目に加え、最終評価の10%分のウェイトで評価した。最終レポート提出者の全員が5段階中4以上の評価を得た。</li> </ul>
3-			
3-			

記入 2011年 8月 31日

科目名 GCP 社会システム・ソリューション

担当者名(所属) 篠宮 紀彦(工学部・情報システム工学科)

該当ラーニング・アウトカムズ大項目: 2. 多面的かつ論理的に思考する。

該当ラーニング・アウトカムズ細目

一つの事象を多面的に考察することができる。

問題・課題の本質を推察し、適切な仮説を立てることができる。

質的または量的根拠にもとづき、結論の妥当性を判断できる。

該当 L0s 細目	A 該当 L0s 細目とシラバスの「到達目標」がどのようにリンクしているか	B その「到達目標」に対してどのように取り組んだか	C その到達度をどのような評価手法で測り、どう判定したのか
	「3: 既修の知識や技法を活用し、明確な根拠を示しながら、類推的、機能的、演繹的に解決手段を探っていくことができる」にリンクしている。	第5回、第8回、第9回の講義にて、ゲーム理論、在庫管理手法、待ち行列理論を学んだ後、実際の社会問題に照らし合わせて、どのように解決すべきかをグループに分かれて議論した。	中間テスト、期末テスト、レポート課題によって、いくつかの社会問題について論述させた。
	「1: 複雑な社会問題に対する観察や試行錯誤を通して抽象化し、解決の	第2回、第3回の講義にて、複雑なシステムを抽象化する技法を学び、それぞれ独	中間テスト、レポート課題によって、現存する複雑なシステムを対

	筋道を立てることができる」と「2：抽象化された問題の検証と分析を通し、適切な分野に当てはめることができ、概念と基本的な解決技法を理解している」にリンクしている。	自の観点から問題の本質を論じさせた。	象に抽象化したダイアグラムを作成させ、その根拠を記述させた。
	「4：抽象的な結論を具体事象に置き換え、図や式、ICTなどを用いた多彩な表現手段を用いて客観的な視点から説明することができる」にリンクしている。	ある程度妥当な前提条件によって与えられた数値をもとに例題を考察し、Excelを使って統計的な処理を行い、結論を出力する演習を行った。	レポート課題を出し、授業外時間を使って、Excelなどで結果をまとめさせた。

記入 2011年 8月 31日

科目名 世界史入門

担当者名(所属) 村上 信明(文学部)

該当ラーニング・アウトカムズ大項目：3. 問題解決に必要な知識・情報を適切な手段を用いて入手し、活用する。

該当ラーニング・アウトカムズ細目

必要かつ十分な情報を収集することができる。

情報とその情報源の信憑性を判断できる。

特定の目的(問題解決)に情報を有効的に利用できる。

情報の入手、利用に際し法律および倫理を尊重する。

該当 L0s 細目	A 該当 L0s 細目とシラバスの「到達目標」がどのようにリンクしているか	B その「到達目標」に対してどのように取り組んだか	C その到達度をどのような評価手法で測り、どう判定したのか
		ガイダンスにおいて山川出版社、中央公論社、講談社などから出版されている歴史学関係の概説初を紹介し、小レポート執筆時に利用するよう指導した。	小レポート(5点満点、計3回)のうち、参考文献に関する部分を1点とした。教科書以外に自らでレポート執筆に的確な参考文献を探

			し、利用した場合、1点として評価した。
		小レポート執筆時の参考文献に関して、第一線の歴史研究者が執筆したものを利用することを薦めた。またインターネット上の情報については、学術機関の公式なwebサイト以外は参考文献とは認めないこととした。	小レポートで必ず参考文献を提示させ、適切でない文献(小説や受験参考書など)場合に減点した(-0.2~-1点)
	シラバス到達目標の「世界各地に存在した個々の文明・文化・人間・国家等がどのように結びついていたのか、つねにその相互関連性に着目し、地球社会・人類社会の歴史として世界史を捉える視点を身につける」にリンク	小レポートでは、「シルクロード」「イスラーム=ネットワーク」「近代世界システム」など地域世界間のネットワークに関して、(1)概要、(2)歴史的重要性を論じる課題を出した。	教科書や参考文献を参照し、左記(1)・(2)に関して適切に記述できていれば、それぞれ2点として評価した。特に(2)では、感想ではなく、参考文献をもとに論理的かつ説得的に自分の意見を述べられていた場合に2点とし、これらのことができていない場合には1~0点とした。
		小レポートにおいて、参考文献を明示するよう指導した。また剽窃行為を禁止した。	参考文献を明記しない場合、-1点とした。また剽窃行為が発覚した場合にはN判定とした。

記入 2012年 9月 12日

科目名 文章表現法 a

担当者名(所属) 山崎 めぐみ(学士課程教育機構)

該当ラーニング・アウトカムズ大項目：4. 日本語による多様な表現方法を取得し、明瞭に論じ述べる。

該当ラーニング・アウトカムズ細目：

1. 論述文において、段落構成、文章作成の基礎作法を理解し、論点が明らかな文章を作成することができる。
2. プレゼンテーションにおいて、目的と内容、聴衆に応じて適切な表現と様式を用い、明瞭かつ説得力を持って論点を伝えることができる。
3. 討議において、他者の見解の考察を踏まえ、論点と根拠を明確にし、自身の見解を伝えることができる。

該当 L0s 細目	A 該当 L0s 細目とシラバスの「到達目標」がどのようにリンクしているか	B その「到達目標」に対してどのように取り組んだか	C その到達度をどのような評価手法で測り、どう判定したのか
1 論述文	論文・レポートとは何か	講義・グループワーク レポート作成	* 最終レポート。ルーブリックにチェック項目を設け、レポートとしての要素を評価した。
	論文・レポートに要求される論理性	講義・グループワーク 練習問題	* 練習問題。主題に対し、文献や意見が適切か判断する練習を行った。 * 最終レポート
	論文・レポートにふさわしい文章	講義・グループワーク 練習問題	* 練習問題 * 最終レポート
	論文・レポートの文体と表記を学ぶ	講義 ワークシート 練習問題	* 練習問題 * 最終レポート
	論文・レポートで使われる用語	講義 ワークシート 練習問題	* 練習問題 * 最終レポート
	あいまいな表現をなくそう	講義 ワークシート 練習問題	* 練習問題 * 最終レポート
	論文作成の具体的な手順	テーマの設定 基礎的な文献の調査と資料収集 アウトラインの作成 アウトラインに沿った文献・資料整理と収集作業 推敲	* マインド・マップ * ワークシート * アウトライン チェック * 引用・参考文献の書式チェック



2 プレゼンテーション	履修者数・11週短縮のため、実施ができなかった		
3 ディスカッション		グループワーク	*ピア・レビュー ワークシート *ディスカッション ルーブリック

記入 2012年9月17日

科目名 不思議な科学のはなし

担当者名(所属) 石井 良夫(工学部情報・システム工学科)

該当ラーニング・アウトカムズ大項目: 4. 日本語による多様な表現方法を習得し、明瞭に論じ述べる。

該当ラーニング・アウトカムズ細目

論述文において、段落構成、文章作成の基礎作法を理解し、論点が明らかな文章を作成することができる。

プレゼンテーションにおいて、目的と内容、聴衆に応じて適切な表現と様式を用い、明瞭かつ説得力を持って論点を伝えることができる。

討議において、他者の見解の考察を踏まえ、論点と根拠を明確にし、自身の見解を伝えることができる。

該当 L0s 細目	A 該当 L0s 細目とシラバスの「到達目標」がどのようにリンクしているか	B その「到達目標」に対してどのように取り組んだか	C その到達度をどのような評価手法で測り、どう判定したのか
	教養程度の理解度を得て、課題についてレポートを作成できることにリンク	講義内容に対応したテーマについて課題を明示し、学生一人一人にレポート作成を課した。	教員が提出されたレポートを評価した。簡単なルーブリック評価を行った。(課題についての達成度のみ評価、A. 優れている、B. 課題達成、C. 劣っている)
	道具としての基本的な数学、物理学の理解を得て、課題についての内容の説明、プレゼンテーションなどができるにリンク	学生一人一人が作成した課題について、その内容についてのプレゼンテーションを行い、他の学生が理解できるように説明を行った。	教員がプレゼンテーションを評価した。(発表時間、内容、理解度(質問に対する説明)また、グループ内での発表では、学生にグループ発表における貢献度とし

			て評価させた。
	教養程度の理解度を得て、かつ基本的な数学、物理学の理解を得て、どんな利用があるかなどの応用を考え考察し、グループ内での討議において自分の意見を説明し、他者の見解の考察を踏まえ、論点と根拠を明確にすることにリンク	7~8名からなるチームを編成し、その中で課題について各自が調べてきた内容を一人ずつプレゼンテーションし、自分の意見を説明し、かつ他の意見を理解し討議し、チーム内でひとつの意見としてまとめた。また、チームとして全員参加でプレゼンテーションを行った。	チーム内での討議で学生の参加度、貢献度を学生個人に評価させた。課題ごとのチーム内でのそれらの評価をまとめ、個人の総合評価とした。チーム毎の発表については、発表を聞いた他チームで意見をまとめチーム毎に評価を行った。(評価基準：チームワーク、インパクト、知識獲得)

記入 2011 年 8 月 31 日

科目名 English for Academic Purposes: Upper Intermediate

担当者名 (所属) Michael Riley and Shin Hashimoto (WLC; Compiled by Lary MacDonald)

該当ラーニング・アウトカムズ大項目: 5. English for Academic Purposes: Upper Intermediate

該当ラーニング・アウトカムズ細目:

- Speaking Assessments
- Fluency and Coherence
- Lexical Resource
- Grammatical Range

該当 L0s 細目	A 該当 L0s 細目とシラバスの「到達目標」がどのようにリンクしているか	B その「到達目標」に対してどのように取り組んだか	C その到達度をどのような評価手法で測り、どう判定したのか
	Fluency and coherence <ul style="list-style-type: none"> <li>• Demonstrate initiative</li> <li>• sustain and close basic communicative tasks</li> </ul>	Speaking Activities <ul style="list-style-type: none"> <li>• Information Gap</li> <li>• Interviews</li> <li>• Discussions</li> </ul>	Overall, results from pre- and post-speaking assessments revealed an improvement .6 points on

	<ul style="list-style-type: none"> <li>• willingness to participate</li> <li>• generally understands question</li> <li>• able to ask for clarification</li> <li>• generally understood by interlocutor</li> <li>• demonstrated emerging command of communicative competence</li> <li>• uses circumlocution and rephrasing</li> <li>• repetition and pauses may occur but do not interfere with comprehension</li> </ul> <p>Student can demonstrate some of the following skills</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Giving Opinions</li> <li>• Agreeing/Disagreeing</li> <li>• Discussing advantages/disadvantages</li> <li>• Making suggestions</li> <li>• Giving answers</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Debates</li> <li>• Presentations</li> <li>• Role Play</li> <li>• Pair Work</li> <li>• Planning</li> </ul> <p>Pronunciation</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Word stress</li> <li>• -ed endings</li> </ul> <p>Listening Activities</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Conversations</li> <li>• Interviews</li> <li>• Lectures</li> <li>• Debates</li> </ul>	<p>the 10-point scale, from 4.0 to 4.6. In the category of fluency and coherence, students improved from pre-test 4.1 to post-test 4.8.</p> <p>In the context of fluency and coherence, students at this level demonstrate an ability to</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Maintain face to face communication</li> <li>• Use simple sentential responses with some extension when prompted</li> <li>• Although mistake arise, can be understood by sympathetic interlocutor through rephrasing</li> <li>• Some interference of L1 can occur</li> <li>• Pauses can occur causing but usually overcome quickly</li> </ul>
--	--	---	---

	<p>Lexical Resource:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• general vocabulary on concrete topics</li> <li>• emerging command of abstract ideas</li> <li>• Adjectives</li> <li>• Prefixes</li> <li>• Phrasal verbs</li> <li>• Expressions connecting time and work</li> <li>• Collocation</li> </ul>	<p><b>Vocabulary building exercises incorporated into textbooks units:</b></p> <p>Ex: Unit 1 Personality</p> <p>Exercise 1: Work with a partner and make of list of personality adjectives: e.g Friendly, shy, happy, etc.</p> <p>Exercise 2: Choose three adjectives that describe your personality</p> <p>Exercise 3: Look at the adjectives related to personality, Which are positive and which are negative (e.g ambitious, moody, reliable, sociable, etc.)</p> <p>Exercise 4: Match the word to make compound adjectives (e.g easy-going, open-minded</p>	<p>In the category of lexical resource (vocabulary), students improved from a pre-test average of 4 to a post-test average of 4.5.</p> <p>Students at this level demonstrate the following vocabulary skills</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Uses an increasing number of verbs and modifiers</li> <li>• Vocabulary more concrete and personalized</li> <li>• Visible effort to search for appropriate vocabulary</li> </ul>
	<p>Grammatical Range</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• control of verb tenses (simple, progressive, past, perfect)</li> <li>• emerging use of compound sentence structure</li> <li>• Present simple and continuous</li> <li>• Past simple, regular and irregular verbs</li> <li>• Present perfect simple and past simple</li> <li>• Present perfect</li> </ul>	<p><b>Grammar development exercises incorporated into textbooks units</b></p> <p>Unit 1: Present simple and present continuous</p> <p>Unit 2: Present Perfect and past simple</p> <p>Unit 3: Present Perfect simple and present perfect continuous</p> <p>Etc....</p>	<p>In the category of grammatical range, students improved from a post-test score of 3.9 to a post-test score of 4.4.</p> <p>Students at this level demonstrate the following grammatical skills</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Rely heavily on simple, present and future tenses</li> <li>• Significant levels of inaccurate grammar evident</li> </ul>

	continuous <ul style="list-style-type: none"> <li>• Past continuous</li> <li>• Past perfect</li> </ul>		in responses <ul style="list-style-type: none"> <li>• Errors can sometimes interfere with communication</li> </ul>
--	--	--	--

記入 23年 8月25日

科目名 ドイツ語 ・ (月曜2時限・木曜2時限)

担当者名(所属) 田中 亮平 (文学部)

該当ラーニング・アウトカムズ大項目：5. 英語と母語以外の他外国語でコミュニケーションを図る。

該当ラーニング・アウトカムズ細目

コミュニケーション、会話を行うための基礎的な技能を身につけている。

該当 L0s 細目	A 該当 L0s 細目とシラバスの「到達目標」がどのようにリンクしているか	B その「到達目標」に対してどのように取り組んだか	C その到達度をどのような評価手法で測り、どう判定したのか
	<p>シラバスに記載した到達目標は以下の通りでこの細目を具体的に詳述したものである。</p> <p>「ドイツ語 ・ 30回分を終わると、EUが定めたA1からC2の6段階にわけられた共通評価基準で、初歩のA1の、そのまた半分を終えたこととなります。日本のドイツ語技能検定試験（通称独検）では5級レベルに到達します。</p> <p>前後期を通算して から を履修した時に期待される到達度 A1 の詳細を以下に示します。</p> <p>『常套的で日常的な表現</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・テキストを EU 評価基準準拠のものを使用した。</li> <li>・4能力別の Can-Do リストが明示しており、各課終了ごとに学生自身に自己評価させた。</li> <li>・これとは別に語彙の習得と定着のために、各時間の初めに単語テストを行った。</li> <li>・あわせて文法確認のための練習問題を復習用に宿題とし、同じく次の時間の初めにテストした。</li> <li>・基本文系の習得と定着のために、暗証例文を提示し、翌週に定着度をテストした。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・細目の到達度を図るために口頭プレゼンテーションと筆記によるテストを行った。</li> <li>・口頭プレゼンテーションの課題は「自分自身、自分の身近な人々について語り、会話相手にも問う。」「住居、買い物、食事のうちから選んだテーマについて、応答をする。」「一日或は一週間のスケジュールを語り合う。」の3つのパートからなるダイアログを演ずる。制限時間は3分。挨拶などを除き、合計 15 の文を発言した場合を</li> </ul>

	<p>や、ごく単純な文を理解・使用して、実際的な欲求を充足することができる。自分自身および他人の紹介をし、他者にその身上についての質問をし、その種の問いに答えることができる（住んでいるところ、知っている人々、所持しているものなど）。会話の相手がゆっくりはつきりと話し、助け船を出してくれれば、簡単な意思疎通ができる。』</p>	<p>25点満点とし、顕著な発音や文法の誤りを減点した。このクラスでは、このパートの平均点は22点であり9割近くの達成度であった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・一方筆記試験は、単語及び例文の暗証と、教科書付属のテスト問題を抜粋して実施した。合計点は100点だが、評価には半分の50点満点に換算した。平均点は32.5点で6割強だった。</li> <li>・平常点を25点加えたが、これは毎回の単語および暗唱文テストの合計点数によった。平均は18.7点で、7割強だった。</li> <li>・全体の総合計点の平均は73.1点であった。</li> </ul>
--	---	--

記入 2011年 08月 28日

科目名 共通科目中国語

担当者名(所属) 汪 鴻祥(ワールドランゲージセンター)

該当ラーニング・アウトカムズ大項目: 5. 英語と母語以外の他外国語でコミュニケーションを図る。

該当ラーニング・アウトカムズ細目:

コミュニケーション、会話を行うための基礎的な技能を身につけている。

<p>該当 LOs 細目</p>	<p>A 該当 LOs 細目とシラバスの「到達目標」がどのようにリンクしているか</p>	<p>B その「到達目標」に対してどのように取り組んだか</p>	<p>C その到達度をどのような評価手法で測り、どう判定したのか</p>
----------------------	--	----------------------------------	--------------------------------------

5の	シラバス到達目標の「基礎的文法を理解し、「読む」、「聴く」、「話す」、「書く」などの基本技能を身につけ、総合的な中国語能力の向上を図ることを目指します。」にリンク	毎週「中国語」と「中国語」のセットで2回授業を行い、「中国語」は各課の新出単語や文法ポイントを主要な内容として授業をし、「中国語」は、各課の練習と会話を主要な内容として授業をします。	毎週小テスト或いは練習を行い中間テストと期末統一試験を実施することになっています。
----	---	---	---

記入2011年 9月13日

科目名 人間教育と創価大学

担当者名(所属) 寺西 宏友(経済学部)

該当ラーニング・アウトカムズ大項目:

6. 学びの意味や社会的責務を考え、自らの目標を設定し、自立(律)的に学ぶ。

該当ラーニング・アウトカムズ細目:

「何のために学ぶのか」といった学びの目的について、自分なりの考えや意見をもっている

社会的市民としての自覚を深めている

目標を設定し、計画的に学習することができる

主体性をもって課題を発見し、学習することができる

該当L0s細目	A 該当L0s細目とシラバスの「到達目標」がどのようにリンクしているか	B その「到達目標」に対してどのように取り組んだか	C その到達度をどのような評価手法で測り、どう判定したのか
1「何のために学ぶのか」	創立者の著作・講演をもとに、創価大学の歴史と理念を知り、議論することを通して、自身が大学で学ぶことの意味と課題を見定める。	レポート	ループリックで以下のように評価した。 1. 創価大学の教育理念が十分に理解され、自身の学生生活に反映しようとする意志が表明されている(3点) 2. 創価大学の教育理念が、十分に理解されている(2点) 3. 創価大学の教育理念に対する考察が

			なされている(1点)
3 目標設定・計画的学習 4 主体性をもち学習	...自身が大学で学ぶことの意味と課題を見定める。	レポート	ループリックで以下のように評価した 1. 自身の将来像が具体的に言及され、それと自身の学生生活との関連付けがなされている(3点) 2. 自身の将来像がある程度具体的に言及されている(2点) 3. 自身の将来像が言及されてはいるが、具体的ではない(1点)

記入 2011年 8月 30日

科目名 キャリアビジョン

担当者名(所属) 西浦 昭雄(学士課程教育機構)

該当ラーニング・アウトカムズ大項目：6. 学びの意味や社会的責務を考え、自らの目標を設定し、自立(律)的に学ぶ。

該当ラーニング・アウトカムズ細目

「何のために学ぶのか」との問いかけに、自分なりの考えや意見をもっている  
社会的市民としての自覚を深めている  
目標を設定し、計画的に学習することができる  
主体性をもって課題を発見し、学習することができる

該当 L0s 細目	A 該当 L0s 細目とシラバスの「到達目標」がどのようにリンクしているか	B その「到達目標」に対してどのように取り組んだか	C その到達度をどのような評価手法で測り、どう判定したのか
	該当なし		
	シラバスに到達目標の「社会的市民としての自覚を深め、進路を選択する力をつけること」にリンク	第3回講義において「自己分析講座」、第5回講座において「適職の探し方講座」を実施し、理解度を深めるために講義においてグループディスカッションを取り入れた	期末課題として、現段階での第一志望企業を想定し、自己PR、学生時代に取りくんだこと、志望動機を提出させたところ、提出者全員が一定以上の評価であった。



	シラバスに到達目標の「目標を設定し、計画的に学習することができる」にリンク	第9回講義において就職内定をとった先輩による体験を入れた「就職プランニング講座」を行い、講義後にグループワークを実施した。	期末課題として残りの大学生活の目標や月ごとの課題を明示した「就職プランニングシート」を提出させたところ、提出者全員が一定以上の評価であった。
	シラバスに到達目標の「主体性をもって課題を発見し、学習することができる」にリンク	第7回講義において「企業研究の方法」について講義した上で、志望業界で28グループ（各6～7人）に分けて協同学習をし、第11回講義において2～3グループずつでの発表会を行い、そこには教職員や4年生でその業界に就職を決めた先輩が入って助言した。	中間課題として「企業研究課題シート」を提出した。さらに、期末課題としてグループで制作したパワーポイントのファイルを提出させた。提出者全員・全グループが一定以上の評価であった。

記入 2011年 8月 26日

科目名 GCP プログラムゼミ

担当者名（所属） 安野 舞子（非常勤） / 羽賀 文湖（キャリアセンター）

該当ラーニング・アウトカムズ大項目：6. 学びの意味や社会的責務を考え、自らの目標を設定し、自立(律)的に学ぶ。

該当ラーニング・アウトカムズ細目

「何のために学ぶのか」との問いかけに、自分なりの考えや意見をもっている  
 社会的市民としての自覚を深めている  
 目標を設定し、計画的に学習することができる  
 主体性をもって課題を発見し、学習することができる

該当 L0s 細目	A 該当 L0s 細目とシラバスの「到達目標」がどのようにリンクしているか	B その「到達目標」に対してどのように取り組んだか	C その到達度をどのような評価手法で測り、どう判定したのか
	シラバスの到達目標「自分の価値観や信念、倫理観、およびアイデンティ	・毎回の授業終わりに「コミュニケーションシート」に記入させることにより、	・二人の講師が全員の「コミュニケーションシート」に毎回目を通

<p>ティについて理解を深める」にリンクしている。</p>	<p>その日の学びについて気づいたことや感じたことについて振り返る時間を設けた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・最終回の授業で「My Commitment プレゼンテーション」という一人3分間のプレゼンテーションを行い、「自分が目指したいリーダー像」や「将来の夢」を語りつつ、「そのためにどのような4年間の大学生活(学び)を送るか」について発表してもらった。</li> </ul>	<p>し、どこまで深く自己省察できているか確認した。十分な取組みが見られないと判定された場合は日常点(評価配分30%)から減点することとしていたが、結果的に減点された者はいなかった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・一人ひとりのプレゼンをビデオに録画し、実際のプレゼンおよび録画を見ながらループリック(評価基準表)を基に評価した。評価配分は、全体のうち10%とした。</li> </ul>
<p>シラバスの到達目標「自分にとっての『リーダーシップ』および『リーダー』論を発見する」にリンクしている。</p>	<p>本授業ではリーダー、およびリーダーシップの持論が持てるようになることを目指して2コマの授業時間を使ってリーダーシップ論について講義したが、その際、「地球市民とは何か?」「<u>地球市民としてのリーダー/リーダーシップとはどういうことか?</u>」を考えさせるグループディスカッションを行ったり、レポートを課した。</p>	<p>レポート(課題:「地球市民」としてのリーダーおよびリーダーシップはどうあるべきか?「地球市民」について考察した上で、あなたにとっての地球市民のリーダー像やリーダーシップのあり方について、適宜文献を参照しながら、自由に意見を論述しなさい。)を課し、ループリックをもとに評価した(評価基準の内容は課題発表の際、学生にも提示した)。評価配分は、全体のうち30%とした。</p>
<p>シラバスの到達目標「リ</p>	<p>授業の中で「リーダーにな</p>	<p>「翌週までの課題」と</p>

	ーダーになるためのキャリアデザインの方法（目標設定・行動計画など）を習得する」にリンクしている。	るためのキャリアデザイン」と称して、「ビジョン、目標、計画のマネジメントサイクル」について講義と個人およびグループワークを行った。	して出したワークシートにきちんと取り組んでいるかをグループワーク中に確認し、十分な取組みが見られないと判定された場合は日常点（評価配分 30%）から減点した。
	なし	期末レポートとして「仕事に関するリサーチペーパー」を課し、自分が将来従事したいと考えている職業を調べさせることで、自らの課題（自分の特性や価値観は何で、どのような職業につきたい/つくべきか）を発見し、主体性をもって調べることの大切さを経験してもらった。	レポート（課題：あなたが将来従事したいと考えている職業を2つ（以上）選び、リサーチを行いなさい）を課し、ループリックをもとに評価した。評価配分は、全体のうち30%とした。

記入 2011 年 8 月 4 日

科目名 地域研究：ドイツ研究

担当者名（所属） 西田 哲史（ワールドランゲージセンター）

該当ラーニング・アウトカムズ大項目：7 自他の文化・伝統を理解し、その差異を尊重する。

該当ラーニング・アウトカムズ細目：

自らの文化や考えを他者にわかりやすく伝えることができる。

自分とは異なるバックグラウンドをもった人と議論ができる。

他者の意見を傾聴し、他国の文化や伝統から学ぼうとする姿勢がある。

該当 L0s 細目	A 該当 L0s 細目とシラバスの「到達目標」がどのようにリンクしているか	B その「到達目標」に対してどのように取り組んだか	C その到達度をどのような評価手法で測り、どう判定したのか
	シラバス記載の到達目標である「ドイツに関す	書評レポート。 プレゼンテーション	全員ではないにしる、何人かの学生は、自

	<p>る知見を深め、それを手がかりに異文化理解力、<u>自国文化への批判的</u> <u>理解力を身につける</u>」にリンク。</p>	<p>ン。</p>	<p>分が日本人であること、あるいは日本という国を意識して書評レポートを作成してくれた。ただし、今期はそれを具体的に評価し、点数化することはしなかった。</p> <p>書評レポートと同様に、日本との比較の視点を入れてのプレゼンが意外に多く、その点では非常に良かったと思う。ただし、上と同様に、今期はそれを具体的に評価し、点数化することはしなかった。</p>
	<p>なし。</p>		
	<p>シラバス記載の到達目標である「ドイツに関する知見を深め、それを手がかりに異文化理解力、<u>自国文化への批判的</u> <u>理解力を身につける</u>」にリンク。</p>	<p>各回の授業では、ドイツに関する決まったテーマについて、教員（私自身）がプレゼンターとなって、パワーポイント（PP）を用いて講義をしたが、その PP 資料は事前に配布し、必ず一読するように指示した。授業後は PLAS を通じて、授業内容に関する小レポート課題を課した（今期は全 10 回）。</p> <p>授業外学習の一環として、こちらが用意したドイツの様々なテーマに関する文献リスト（137</p>	<p>課題レポートの作成に当たっては、PP 資料だけでなく、授業中にノートしたものや、場合によっては参考文献に当たるよう指示した。</p> <p>文献を精読し、熟慮し、それを書評という体裁で文字にすることによって、特定分野ではあるが、ドイツという国を理解する手助けになったはずである。</p> <p>発表者を除く授業参加者全員が評価シートを記入した。全員の評価シートは、教員によるチェ</p>

		<p>冊)から一冊を選択して、書評レポートの作成を課した(ただし、文献リストに無い書籍の選択も可とした)。文献選定、読書、レポート作成・提出に約2ヶ月間を当てた。また、書評レポート作成に際しては、実験的な試みとして、評者(学生)の出身国(今期は全て日本)との比較の視点を - 可能であれば - 入れるよう事前に指示した。</p> <p>授業後半(今期は第8回~第11回目授業)に、ドイツについて興味・関心のあるテーマで、各自が作成したレジメもしくはPP資料に基づいてプレゼンテーションをもらった(1名を除き全員がPPを使用)。発表に際しては、単に情報を羅列するのではなく、情報を整理し、そのうえで最後に自分の考えを述べるようにアドバイスした。発表に続き質疑応答の時間を設けると同時に、学生にはそれぞれの発表を評価してもらった。</p> <p>ドイツ全般(社会・経済・政治・歴史・文化etc.)に関する理解度を確認するために定期試験を</p>	<p>ック後、発表者にフィードバック資料として手渡した。教員による評価シートは各学生の成績評価(15点)に反映した。</p> <p>定期試験は大きく3つの設問から構成されている。1つ目が、講義前半(第1回目~第5回目)で扱ったテーマ「ドイツの国土と人」と「ドイツの歴史」から出題した。2つ目が、6回目の講義以降に扱った様々なテーマに関する設問で、キーワードを使った小論形式とした。3つ目は、授業後半で各学生が行ったプレゼンの内容を文章化(800~1000字)してもらった設問とした(字数、起承転結、自分の意見・見解などを総合:20点)。この3つ目の設問については、試験前にきちんと告知し、しっかり準備するように指示した。この定期試験は、(42+18+20)÷2=40点分として、各学生の成績評価に反映した</p>
--	--	--	--

		課した。	
--	--	------	--

記入 2011年 8月 30日

科目名 アフリカ研究 C

担当者名(所属) 西浦 昭雄(学士課程教育機構)

該当ラーニング・アウトカムズ大項目: 7 自他の文化・伝統を理解し、その差異を尊重する。

該当ラーニング・アウトカムズ細目

自らの文化や考えを他者にわかりやすく伝えることができる

自分とは異なるバックグラウンドをもった人と議論ができる

他者の意見を傾聴し、他国の分野や伝統から学ぼうとする姿勢がある

該当 LOs 細目	A 該当 LOs 細目とシラバスの「到達目標」がどのようにリンクしているか	B その「到達目標」に対してどのように取り組んだか	C その到達度をどのような評価手法で測り、どう判定したのか
	シラバスの到達目標の「日本と南アフリカの共通点と相違点について伝えることができる」にリンク	・第2回講義において、「南アフリカと日本の関係」について講義した後に、グループに分けてディスカッションを行った。	・第2回講義終了時に5分程度使って「授業アンケート」を実施し、その中で本テーマについての意見や感想について記述してもらった。 ・その記述から、大部分の学生が講義目的を達成したものと推測された。同アンケートで記載されていた内容や質問について第3回授業の冒頭にフォローアップした。
	シラバスの到達目標の「自分とは異なるバックグラウンドをもった人と議論できる」にリンク	・「なぜアパルトヘイトが発生したのか」「なぜマンデラは非暴力主義を放棄したのか」といった論争的なテーマについては、予習課題を課し、授業の冒頭10分間で「予習チェック」としてま	・左記のようにグループ・ディスカッションを複数回にわたって実施したが、それを評価することはできなかった。

		<p>とめ、それを提出させた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業で解説した後、それらのテーマについてグループ・ディスカッションをした。その際には、毎回異なる学生とグループを構成するように心掛けた。</li> </ul>	
	<p>シラバスの到達目標の「南アフリカの経験から学ぼうとする姿勢がある」にリンク</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・終始「南アフリカから学ぼう」という姿勢で講義することを心掛けた。また、授業の予習課題において、本項目に関連するテーマで複数回だし、授業の冒頭に10分間で「予習チェック」としてまとめさせた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「予習チェック」の答案から大部分の学生において、南アフリカの事象や経験について学ぼうとする姿勢がくみとれた。</li> <li>・成績評価の30%を占める中間レポート課題で3つの選択課題の一つとして、「南アフリカの経験から学ぶこと」を課し、学生はリサーチをして2000字以上のレポートを作成した。それを受けて全員にレポートのフィードバックをした。</li> </ul>

記入 2012年 8月 3日

科目名 Soka Education

担当者名(所属) 桑原 ビクター (教育学部)

該当ラーニング・アウトカムズ大項目：7. 自他の文化・伝統を理解し、その差異を尊重する。

該当ラーニング・アウトカムズ細目：

自らの文化や考えを他者にわかりやすく伝えることができる

自分とは異なるバックグラウンドをもった人と議論ができる

他者の意見を傾聴し、他国の文化や伝統から学ぼうとする姿勢がある

該当 L0s 細目	A 該当 L0s 細目と シラバスの「到達目 標」がどのようにリン クしているか	B その「到達目標」に対 してどのように取り組ん だか	C その到達度をどのような評価手 法で測り、どう判定したのか
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・創価教育の歴史をシラバスの中に取り込むことで対応。</li> <li>・創価教育と関連する文献を課題とした。</li> <li>・グループディスカッションを毎週行う。</li> <li>・創価教育(文化)についての研究レポート</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・歴史については講義内容で取り扱った。</li> <li>・読み終わった文献に関するクイズ</li> <li>・グループディスカッションを毎週行いました。</li> <li>・レポートを書かせた。</li> <li>・最初の授業時と最後の授業時にアンケートを行った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・歴史は評価していない。</li> <li>・クイズを点数化した。</li> <li>・グループディスカッション後、クラス全体で意見を発表した生徒に参加点を与えた。</li> <li>・期末レポートとして、1500～2000英ワードの創価教育についての研究レポートを課した。全体成績の25%の評価をつけた。</li> <li>・判定はしていない。殆どの生徒は授業の内容に満足していた。この事前、事後アンケートの内容は同じもので、比較すると、多くの生徒が創価教育の定義を授業をとる前よりさらに深めていた。</li> </ul>

記入 2010年9月10日

科目名 共通総合演習

担当者名(所属) 佐々木 諭(学士課程教育機構)

該当ラーニング・アウトカムズ大項目: 8. 人類の幸福と平和を考え、自己の判断基準をもつ。

該当ラーニング・アウトカムズ細目

- 世界の平和などグローバル問題について関心を持ち、学ぼうとしている
- 自分だけではなく、他者の幸福について考えることができる
- 自分の立場や考えを、説得力を持って述べるができる



該当 LOs 細目	A 該当 LOs 細目とシラバスの「到達目標」がどのようにリンクしているか	B その「到達目標」に対してどのように取り組んだか	C その到達度をどのような評価手法で測り、どう判定したのか
	到達目標(1)「途上国の貧困と健康・医療の問題に関心を持ち、現状と課題を理解し」にリンクしている。	本演習のトピックは、途上国の健康と保健医療であり、創大生にはあまり馴染みのない内容であるため、学生が関心を持ち学びを深めるための導入講義を授業の進捗に応じて行った。学生は講義内容に基づき、グループ学習とプレゼンテーションに取り組んだ。また、グループ発表には必ずディスカッションを取り入れるようにし、各グループがディスカッションテーマを定め、ディスカッションの進行も担うようにした。	グループのプレゼンテーションを教員が、「リサーチ」、「内容理解」、「分析・考察」の視点から評価し、学生によるピアレビューにおいても「リサーチ力」、「構成・企画力」を評価し、成績評価に反映した。
	到達目標(1)「要因に関し多面的に考察する能力を身につける」ならびに到達目標(2)「介入効果を複眼的に考察する力を習得する」にリンクしている。	途上国が直面する健康と保健医療問題に関し、その要因とどのように要因を克服し、健康状況を改善するかを学び、考察するように授業を企画、実施した。グループ発表のテーマは、「『健康の格差』とは何か、なぜそのような格差が生まれるのか?」、「『人間の安全保障』が目指すものは何か?人間の安全保障と健康との関連、これからの国際保健協力」、アジアやアフリカはどのような健康問題を抱え、どのように対策を施しているのか」を設定し、	「途上国においてあなたが考える健康問題と要因を特定し、その要因の解決の為にどのような方途が考えられるかまとめなさい」との3000字のレポート課題を課し、「問題の提示」、「問題の考察」、「解決方途の提示」、「自身との関連付け」の項目をルーブリックに沿って評価した。

		途上国の人々の幸福について深く考察するように努めた。	
到達目標(3)「論理的に解決方途を説明する力を身につける」にリンクしている。	グループワーク(4グループ)として、「プロジェクトの立案」の課題を提示し、「問題分析」、「目的分析」のロジカルフレームワークツールを用い、論理的に問題の要因と解決方途を考察した。最終的に、立案されたプロジェクトは、プロジェクト・デザイン・マトリックスにまとめ、各グループが発表するようにした。各グループの発表後に、講評とピアレビュー結果をフィードバックすることにより、学生の更なる能力向上に取り組んだ。	教員と学生のピアレビューにより、「問題分析」、「目的分析」、「プロジェクト発表の」の3回にわたるグループ発表を評価した。「問題分析」は「リサーチ力」と「論理性」、「目的分析」は「考察力」と「包括性」、「プロジェクト発表」は「プロジェクト目標の達成は上位目標の改善に直接的に寄与している」、「成果の達成はプロジェクト目標の達成を確実にもたらず」、「活動を十分に実施することにより、成果が果たされる」の3項目より評価した。	

別添資料 2

**共通科目ラーニング・アウトカムズ (L0s)  
2011 年度後期アセスメント・パイロット授業報告書**

科目名 バレーボール

担当者名 (所属) 久保田 秀明 (教育学部)

該当ラーニング・アウトカムズ大項目: 人文・社会・自然科学、健康科学領域の基礎知識を理解する。

該当ラーニング・アウトカムズ細目

バレーボールにおける合理的な身体の動かし方に関する自覚的認識を高める

他者と協同する方法について体験的に学ぶ

該当 L0s 細目	A 該当 L0s 細目とシラバスの「到達目標」がどのようにリンクしているか	B その「到達目標」に対してどのように取り組んだか	C その到達度をどのような評価手法で測り、どう判定したのか
	バレーボールにおける合理的な身体の動かし方に関する自覚的認識を高める	運動技術を「体幹」「下肢」「上肢」の基礎的な動きに分解して説明する 「体幹」と「下肢」の運動の相互連鎖の後に、「体幹」から「上肢」への動きの連鎖あって運動が完成することを説明する 「体幹」「下肢」「上肢」のそれぞれの動きづくりに焦点を当てた基礎練習のメニューを、班毎に学生が考案し実践する 実際の試合の動きに合わせた応用練習のメニューを、班毎に学生が考案し実践する リーグ戦を行い、試合の中で班の練習の成果と個人の上達度を確認する	班別練習の内容を観察し、班としての技術構造の理解度を確認する 概ね理解されていることが認められた 試合を観察し、実践における班別練習の成果を確認する 練習内容の工夫の仕方によって、成果にばらつきが認められた 実技テストを行い、個人の技術の習得度を確認する 特に初心者・中級者に、運動技術の上達が認められた
	他者と協同する方法につ	授業履修時点での、学生	異質なメンバーによっ

	<p>いて体験的に学ぶ</p>	<p>個人の運動履歴を調査し、仮の班分けを行う 仮の班における練習とミニゲームを観察し、調査した運動履歴と合わせて、学生個人のバレーボールのポテンシャルを予測し数値化する この数値をもとに、技術レベルの異なる学生で構成され、可能な限りチームとしての戦力と男女比を等しくした班を9班編成する 学生に、協同学習の考え方と実践方法を説明する 学生はバレーボールの協同学習に貢献する自分自身のリソースを見つけ、班の中での自分の役割を、一部は班員に宣言し一部は個人の自覚の内に留めながら協同学習を行う</p>	<p>て、同レベルの戦力を持つ班を編成することについて、学生から概ね理解と同意が得られた  練習・ミーティング・試合を観察し、協同学習についての理解度を確認する 概ね理解されていることが認められた  練習・ミーティング・試合を観察し、個人の役割の自覚と行動の変容を確認する 特に上級者に、指導法と指導技術の上達が認められた また初心者、遠慮や人任せを排し積極的にプレーに参加する態度に、顕著な変化が認められた</p>
--	-----------------	---	--

科目名 日本語 C

担当者名(所属) 日高 吉隆(日本語・日本文化教育センター)

該当ラーニング・アウトカムズ大項目：4. 日本語による多様な表現方法を習得し、明瞭に論じ述べる。

該当ラーニング・アウトカムズ細目

論述文において、文章作成の基礎作法に基づき、論点が明らかな文章を作成することができる。

<p>該当 L0s 細目</p>	<p>A 該当 L0s 細目とシラバスの「到達目標」がどのようにリンクしているか</p>	<p>B その「到達目標」に対してどのように取り組んだか</p>	<p>C その到達度をどのような評価手法で測り、どう判定したのか</p>
------------------	--	----------------------------------	--------------------------------------

	L0s 細目「論述文において、文章作成の基礎作法に基づき、論点が明確な文章を作成することができる。」が、この科目の到達目標「レポートや論文の基本的な書き方のルール（ことばの使い方）構成（組み立て方）を学習する。」とリンクしている。	毎回、学生が書いたレポートを全員で話し合いながら添削する授業を行った。添削は、授業で学習した基本的な「レポート（論文）の構成」に沿って、論理的に書かれているか、日本語の論文の表現として適切かをポイントとした。	期末の レポート 定期試験で評価した。評価は、基本的な「レポート（論文）の構成」に則っているか、日本語の表現が適切かを基準にした。 評価法の資料を添付する。
--	---	--	---

科目名 GCP プログラムゼミ II

担当者名（所属） 佐々木 諭、清水 強志（学士課程教育機構）、天谷 永（経営学部）

該当ラーニング・アウトカムズ大項目：4. 日本語による多様な表現方法を習得し、明瞭に論じ述べる。

該当ラーニング・アウトカムズ細目

論述文において、文章作成の基礎作法に基づき、論点が明確な文章を作成することができる。

プレゼンテーションにおいて、明確に論点を伝えることができる。

討議において、他者の見解の考察を踏まえ、自身の見解を伝えることができる。

本授業の「到達目標」は以下の通り。

1. 問題発見の手法を理解し、自分たちで問題を定めることができる。
2. 論理的な分析力と批判的考察力を養い、課題テーマの分析を行うことができる。
3. グループ学習を通して他人と共同して課題をやり遂げる力をつける。
4. 調査手法を理解し、課題テーマに応じた調査をデザインできる。
5. 課題テーマ、分析結果を分かり易くプレゼンテーションを行うことができる。
6. 学術的な論文作成のルール、手法を理解し、4000 字の研究論文を書くことができる。

該当 L0s 細目	A 該当 L0s 細目とシラバスの「到達目標」がどのようにリンクしているか	B その「到達目標」に対してどのように取り組んだか	C その到達度をどのような評価手法で測り、どう判定したのか
	「到達目標」6の「学術的な論文作成のルール、	本授業では、受講生のアカデミック・ライティング能力の	問題設定レポートについては、学生に事前

<p>手法を理解し、4000字の研究ペーパーを書くことができる」に該当する。</p>	<p>向上を図るため、問題設定レポート（1200字）とリサーチレポート（4000字）の2回のレポートを課した。いずれのレポートについても、課題提示前に、アカデミックライティングに関する講義（計授業1.5回分）を行い、講義内容が課題に反映されるように努めた。また、リサーチレポートの提出に際しては、事前提出を課し、全学生にコメントのフィードバックを行った。特にリサーチレポートに関しては、CETLの添削指導を活用した文章作成に関する指導と担当教員によるレポートの内容に関する指導の両方の視点から個別に面談しフィードバックを行った。最終レポート（問題設定レポートとリサーチレポート）はいずれも全学生分をまとめ全受講生に配布し、他の学生のレポートを参考にし、よりアカデミックライティング力を高めることを励行した。</p>	<p>に以下の基準を伝え、基準に沿って評価した。「1. 自己の関心が明確にされている」、「2. 関心から、問いを立て、調査や分析がなされている」、「3. どうなっているのか（現状分析）なぜなのか（問題分析）との問題が提示されている」。リサーチレポートについては、事前にレポート作成ガイドラインと評価ルーブリックを学生に提示し、評価ルーブリックに沿ってレポートを判定した。また、授業前と授業後に学生による自己アセスメントを実施し、アカデミック・ライティング力の向上を評価した。</p>
<p>「到達目標」4の「課題テーマ、分析結果を分かり易くプレゼンテーションを行うことができる」に該当する。</p>	<p>本授業では、プレゼンテーションに関する講義を行い（授業1回分）受講生を6グループに分け行ったグループリサーチに関しプレゼンテーションを行った。また、各グループのプレゼンテーションを評価基準に沿って学</p>	<p>各グループごとに20分の発表と5分の質疑応答を行い、評価項目に沿い学生によるピアレビューと教員による評価を行った。また、授業前と授業後に学生による自己アセ</p>

		生によるピアレビューを行い、レビューのフィードバックを行った。各グループには、フィードバックに沿い、プレゼンテーション資料の再提出を課した。最終プレゼンテーション資料は、全グループ分をまとめ全受講生に配布し、よりプレゼンテーション力を高めることを励行した。	スメントを実施し、プレゼンテーション力の向上を評価した。
	「到達目標」3の「グループ学習を通して他人と共同して課題をやり遂げる力をつける」に該当する。	本授業は、グループによるリサーチワークが中心となっており、問題設定から分析、プレゼンテーションに至るまで、グループワークを励行するための「KJ法」、「ロジックツリー」、「プロジェクト企画書」などのワークショップと課題を課した。グループごとに発表または成果を共有する機会を設け、ピアレビューにより、より効果的なグループワークを行うことを心掛けた。	授業前と授業後に学生による自己アセスメントを実施し、グループワーク力の向上を評価した。

科目名 ハンゲル

担当者名(所属) 尹 秀一(WLC)

該当ラーニング・アウトカムズ大項目: 5. 英語と母語以外の他外国語でコミュニケーションを図る。

該当ラーニング・アウトカムズ細目

表現に必要な語彙を知っている。

基本的な文法を理解している。

コミュニケーションのために基本的な技能を身につけている。

該当	A 該当 L0s 細目とシ	B その「到達目標」に対して	C その到達度をどのよ
----	---------------	----------------	-------------

L0s 細目	ラバスの「到達目標」がどのようにリンクしているか	どのように取り組んだか	うな評価手法で測り、どう判定したのか
	単語を繰り返し練習し習得する。	ハングルの学習では、単語の習得に重点をおき時間をさいている。教科書の進め方（ <b>単語トレーニング</b> 学習ポイント（文法・文型） おきかえ練習 本文 チャレンジ） <b>単語の習得</b> 、聴き・書取り練習、2名ペアによるクイズ形式など語彙の定着を図った。	各課が終了した時点で小テストを実施。形式は単語のみ（10分程度）、単語・文型（20分程度）。  定期試験
	基本文型・文法を理解して定着させる。	新しい文法・文型の導入時にプリントを配布し、各自が書き込みながら学習を進めた。既習の文型を定着させるために、毎課ごとに課題プリントで復習した。	1～2課分が終了した段階で小テストを実施。  定期試験
	よく使われる実践的な基本会話を身につける。	授業内で韓国留学生8名とハングルによる会話練習。学習した文型を使い3～4名の小グループでスキットを作成し発表。留学生が評価。	交流を目的としていたので、成績判定のための評価はしていない。

科目名 フランス語

担当者名（所属） 鈴井 宣行 (WLC)

該当ラーニング・アウトカムズ大項目：5. 英語と母語以外の他外国語でのコミュニケーションを図る。

該当ラーニング・アウトカムズ細目

5 - 基本的な文法を理解している。

該当 L0s 細目	A 該当 L0s 細目とシラバスの「到達目標」がどのようにリンクしているか	B その「到達目標」に対してどのように取り組んだか	C その到達度をどのような評価手法で測り、どう判定したのか
-----------	---------------------------------------	---------------------------	-------------------------------



	学習項目を使えること。ことに、語彙並びに文を正しく読めることを目指す。	小テスト形式で、復習テスト（書き取り、動詞の活用など）を各課終了後、実施。できる限り、全員が活動に参加できるように、個別に発音などを指導した。	毎週の小テスト、毎週の復習教室活動(復習の文を読ませるなど)を行って、確認しながら、授業を実施した。
--	-------------------------------------	---	--

科目名 フランス語

担当者名(所属) 鈴井 宣行 (WLC)

該当ラーニング・アウトカムズ大項目：5 . 英語と母語以外の他外国語でのコミュニケーションを図る。

該当ラーニング・アウトカムズ細目

5 - 基本的な文法を理解している。

該当 L0s 細目	A シラバスに記載した授業の「到達目標」	B その「到達目標」に対してどのように取り組んだか	C その到達度をどのような評価手法で測り、どう判定したのか
	仏検4級を目標。学習項目を使って、コミュニケーションを取ることができる。ことに、設定された場面で適切に正しく表現することを目指す。	Dialogue を暗記させ、それを教室活動でペア で全員の前で演じさせる。その時に、Dialogue 通りではなく、自分で表現できるその場面に合った表現も入れて、Dialogue を進めていくことを求めた。但し、これは少々受講生には難しかったようである。また、最後の2週については「星の王子さま」の一部を暗誦させて、「暗誦大会」を実施した。これは効果があったようである。	Dialogue を適正に暗誦し、正しい発音でできたか、さらに、コミュニケーションをしている相手の言葉を聞いて、理解し、Dialogue を進めているかなどをチェックし、評価した。さらに、上級レベルとしては先に述べた、Dialogue 通りだけではなく、自分の表現を取り入れて、Dialogue を進めたかなどを評価し、判定した。

科目名 GCP プログラムゼミ

担当者名(所属) 西浦 昭雄・山崎 めぐみ(学士課程教育機構)

該当ラーニング・アウトカムズ大項目: 8. 人類の幸福と平和を考え、自己の判断基準をもつ。

該当ラーニング・アウトカムズ細目

世界の平和など人類の課題について関心をもち、学ぼうとしている

自分の立場や考えを、説得力を持って述べることができる

該当 L0s 細目	A 該当 L0s 細目とシラバスの「到達目標」がどのようにリンクしているか	B その「到達目標」に対してどのように取り組んだか	C その到達度をどのような評価手法で測り、どう判定したのか
	シラバスの到達目標の「世界的な問題群の少なくとも一つについて現状と背景を深く理解することができる」にリンク	まず、新聞データベース等を活用して希望テーマや関心についてまとめた「テーマ設定シート」を作成した。 次に、地球環境問題、資源・エネルギー問題、貧困・食糧問題、民族紛争・テロという4つの大テーマから学生の希望別にグループを分け、さらに細分化して最終的に7グループに分けた。それ以降はグループごとに約4か月に及ぶ徹底したリサーチを行った。リサーチでは2次資料とともに専門家等へのヒアリングを行い1次資料も集めるようにした。	テーマ設定シートについては「グローバル・イシュー テーマ設定シート」として全員分を冊子化し配布した。 グループごとの研究成果は「成果報告書」として冊子化し配布した。成果報告書では、グループ内の責任分担が明確になるように記述し、シラバスの到達目標内容にそってグループ・個人評価した。 同授業参加者の授業関連の授業外学習時間を毎週記録していたが、1週間の平均時間は約500分であった。
	シラバスの到達目標の「協同学習の成果を他者に対して、的確にプレゼンテーションを行うことができる」「社会	グループごとに協同学習を進め、10月下旬からは中間報告会、12月には最終報告会(成果発表会リハーサル)を行い、教	12月17日に成果発表会を開催し、7グループとも発表した。これには学内外からの参加を可とした。また、成果報告書のサマリー

	<p>に対して具体的な提案を発信できる」にリンク</p>	<p>員・他グループ学生からのコメント・質疑応答を行った。また、成果発表会として学生の成果を発表する機会を設けた。</p>	<p>版を公開する予定である。</p>
--	------------------------------	---	---------------------